

死に至る断食

——聖なる儀礼か自殺か？

堀田 和義

はじめに

ジャイナ教は、今から 2,500 年ほど前にインドの地で誕生し、現在もなおその伝統が生きている。仏教と同じく、ジャイナ教も当時のインドで有力だったバラモン教に対抗する形で誕生した。ジャイナ教は、インドの宗教界でも不殺生（生き物を傷付けないこと）の徹底ぶりでは群を抜いている。出家修行者の場合は、5つの大誓戒のひとつとして不殺生の徹底が要求され、生きとし生けるものすべてを殺めてはならない。このことは、虫を吸い込んで殺さないためのマスクの常時着用、虫を踏み殺さないための箒の常時携帯という、時に滑稽にも映る極端な形で現れている。一方、在家信者の場合は、不殺生を部分的に守ることが要求されるが、それでもなお、肉食主義の徹底、殺生に関わる職業選択の回避などといった形でその生活に大きな制限が加えられている。

このように在家信者の生活さえも大きく制限するほど不殺生を徹底する一方で、ジャイナ教では断食によって自らを死に至らしめる「サッレーカーナ（sallekhanā）」¹と呼ばれる行為が賞讃されている。世界的に有名なフランスの社会学者エミール・デュルケームはその著書『自殺論』の中で、次のように述べている。

ジャイナ教のある教典は、生命はのびさかえるべきものであるから、自殺をしてはならないとのべ、自殺を非としているが、しかし、諸所の多くの聖殿から収集された記録によれば、とりわけ南方のジャイナ教徒においては、宗教的自殺がきわめてひんぱんに行なわれていたことが明らかに²なった。教徒は、絶食して死んでいったのである。

この部分で述べられている行為がサッレーカーナーに他ならない。デュルケームがインド文化圏、さらにはジャイナ教にまで目を配った点は驚くべきことであるが、これほどまでに簡潔な説明からは、その行為の背景にある考え方や実践に至る過程が全く見えてこない。ジャイナ教徒があくまでも「サッレーカーナーは自殺ではない」と主張しているのをよそに、「ジャイナ教では自殺が禁じられていたにもかかわらず、絶食による宗教的自殺が頻繁に行われていた」という単純かつ矛盾した図式で理解されてしまうことすら考えられるだろう。

本稿は、ジャイナ教の基本文献に基づいて、このサッレーカーナーと呼ばれる行為について論じることを目的とする³。そのための手順として、まず、先行研究に基づいて、ジャイナ教における死の分類を概観する。そのうえで、サッレーカーナーの語義・定義、および内容を検討し、ジャイナ教文献におけるサッレーカーナーの位置付けを確認する。さらには、サッレーカーナーのような自発的な死がいわゆる自殺と同一視され、何らかの形で非難されることは当然考えうるため、ジャイナ教においてサッレーカーナーと自殺がいかなる方法で区別されているのかを検討する。また、たとえジャイナ教徒の間で問題が解消されていても、近代的国家における自発的な死は、倫理的問題や法的问题に絡んでくることも考えられる。そこで最後に付論として、T.K.Tukol氏の著書に基づいてその見解を紹介し、検討する。これはインドで司法に携わる者がサッレーカーナーについて論じた貴重な文献である。

1. ジャイナ教における死の分類

ジャイナ教においては、古くより様々な形で死（＝死に方）の分類が行われてきた。サツレーカーナについて検討する前に、先行研究（奥田 [1976]、および *Uttarajjhayanāni*, ed. by Ācārya Mahāprajña, Jain Viśva Bhāratī, 1967, pp.513-518 の注）に基づいて、ジャイナ教における死の分類を概観しておきたい。なお、本稿では、各分類の出典や下位分類にまでは立ち入らないため、詳細については上記の研究を参照されたい。

ジャイナ教の最も古い聖典のひとつに見られる分類では、性行為に耽ったり飲酒・肉食をしたりする者の死に方である「望まない死 (akāmarāṇa)」と行いの良い出家修行者や在家信者の安らかな死に方である「自発的な死 (sakāmarāṇa)」の2つに分けられている〈タイプ①〉⁴。前者は行いの悪さゆえに地獄などに生まれることを怖れて嫌々死んでいくのに対して、後者は来世に一定以上の生まれが保証されているため、怖れることなく死んでいくとされる。この分類方法には、名称が異なる「愚者の死 (bālarāṇa)」⁵「賢者の死 (pañḍiyamarāṇa)」という分類〈タイプ②〉⁶もあるが、このうちの「賢者の死」を出家修行者の死と在家信者の死の2つに分けることによって、より厳密にしたものと考えられる「愚者の死 (bālarāṇa)」⁶「愚者かつ賢者の死 (bālapañḍiyamarāṇa)」⁷「賢者の死 (pañḍiyamarāṇa)」の3種とする分類〈タイプ③〉もある。本稿では、以上の①～③をまとめてグループAと呼ぶことにする。

一方、タイプ②の「愚者の死」「賢者の死」の2つに系統の異なる3つを加えることによって5種とする分類〈タイプ④〉や、生前の認識能力に基づいて「無知な者の死 (annāṇamarāṇa)」⁸「常人の死 (chaumatthamarāṇa)」⁹「全知者の死 (kevalimarāṇa)」の3種とする分類〈タイプ⑤〉も存する。本稿では両者をそれぞれ、グループB、グループCと呼ぶ。その後、これまでに現れた分類を総合した最も詳細な分類として17種に分類するもの〈タイプ⑥〉¹⁰が現れ、さらにそれを要約して5種に分類するもの〈タイプ⑦〉¹¹が現れた（両者をグループDと呼ぶ）。以上をまとめると、次のようになるであろう。

グループ A 〈古い聖典の分類とそのヴァリエーション〉

- ① (1)望まない死 (akāmamarāṇa)／(2)自発的な死 (sakāmamarāṇa)
- ② (1)愚者の死 (bālamaraṇa)／(2)賢者の死 (paṇḍiyamarāṇa)
- ③ (1)愚者の死 (bālamaraṇa)／(2)愚者かつ賢者の死 (bālapaṇḍiyamarāṇa)
／(3)賢者の死 (paṇḍiyamarāṇa)

グループ B 〈A に「寿命決定業（寿命を決定する業）の死」の類別を結合したもの〉

- ④ (1)寿命決定業の粒子の各瞬間の死 (āviimaraṇa)／(2)再び同じ生き物としての生を受けるまでの寿命決定業の粒子の死 (ohimaraṇa)
／(3)もはや同じ生とは結び付かない寿命決定業の粒子の死 (āyantiyamarāṇa)／(4)愚者の死 (bālamaraṇa)／(5)賢者の死 (paṇḍiyamarāṇa)

グループ C 〈生前の認識能力に基づくもの〉

- ⑤ (1)無知な者の死 (annāṇamarāṇa)／(2)常人の死 (chaumatthamarāṇa)
／(3)全知者の死 (kevalimaraṇa)

グループ D 〈これまでの分類を取捨選択・総合したものとそれを簡略化したもの〉

- ⑥ (1)寿命決定業の粒子の各瞬間の死 (āviimaraṇa)／(2)再び同じ生き物としての生を受けるまでの寿命決定業の粒子の死 (ohimaraṇa)
／(3)もはや同じ生とは結び付かない寿命決定業の粒子の死 (āyantiyamarāṇa)／(4)実践を離れてしまった、形だけの出家の死 (valāyamarāṇa)／(5)感官の対象に縛られている一般人の死 (vas'arṭamarāṇa)／(6)羞恥心や体面や高慢さのゆえに、罪過を告白することなく、「内に棘を持ったまま死ぬこと」(antosallamarāṇa)／(7)死者が生前と同じ生を受ける死に方 (tabbhavamarāṇa)／(8)愚者の死 (bālamaraṇa)／(9)賢者の死 (paṇḍiyamarāṇa)／(10)愚者かつ賢者の死 (bālapaṇḍiyamarāṇa)／(11)常人の死 (chaumatthamarāṇa)／(12)全知者の死 (kevalimaraṇa)／(13)縊死 (vehāṇasa)／(14)禿鷹に食われ

て死ぬこと (giddhapaṭṭha) / (15) 断食死 (bhattapaṇṇāmarāṇa) / (16) 身体の動きを多少伴って死んでいくこと (iṅgiṇīmarāṇa) / (17) 身体を全然動かすことなく死んでいくこと (pāovagaṇṇāmarāṇa)

- ⑦ (1) 愚者の中の愚者の死 (bālabālamaraṇa) / (2) 愚者の死 (bālamaraṇa) / (3) 愚者かつ賢者の死 (bālapaṇḍiyamarāṇa) / (4) 賢者の死 (paṇḍiyamarāṇa) / (5) 賢者の中の賢者の死 (paṇḍiyapaṇḍiyamarāṇa)

ここで確認すべきことは、付加的なものを含みつつも、ほとんどの分類法が自発的な「賢者の死」と望まない「愚者の死」の2つを軸に考えられているということである。そして、本稿で扱うサッレーカナーは、この自発的な「賢者の死」に相当する。

2. サッレーカナーの語義・定義、およびその内容

まずはじめに、2つあるジャイナ教の宗派（白衣派と空衣派）の両派から権威を認められているウマースヴァーティ著『タットヴァールタ・アディガマ・スートラ』(*Tattvārthādhigamasūtra*, 以下 TS) とその注釈文献の記述を手がかりにして、サッレーカナーの語義と定義について検討する。TS 7-22 には以下のように記されている。

〔小誓戒を守る在家信者はまた〕死をもって終わるサッレーカナーに従事する者でもある。

この言明により、サッレーカナーという行為が死に至るまで続けられることが明らかにされている。それでは、このサッレーカナーという語は何を意味するのであろうか。ここでは、注釈者たちの見解を紹介しておこう。TS と同じくウマースヴァーティ作と伝えられる白衣派最古の注釈『タットヴァールタ・アディガマ・スートラ・バーシュヤ』(*Tattvārthādhigamasūtrabhāṣya*, 以下 TSbh) には逐語的な注釈が見られないが、空衣派最古の注釈『サル

ヴァールタ・シッディ』(*Sarvārtbasiddhi*, 以下 SS) は、次のように説明している。

「正しく (samyak)」 (= sal) 身体と激情を擦り減らすこと (lekhanā) が、サッレーカーである。外的なものである身体と内的なものである激情を、その原因を放棄させることにより、順序に従って正しく擦り減らすことが、サッレーカーである。

この注釈により、サッレーカー (sallekhanā) という語そのものは、「正しく (sal) 擦り減らす (lekhanā)」という意味であることが分かる。ここで述べられている激情とは、ジャイナ教において好ましくないとされる怒り、高慢、欺瞞、貪欲の 4 つを指すが、それと同時に、身体をも擦り減らすことがサッレーカーであると述べられている。そして、この「身体を擦り減らす」ための方法が断食に他ならない。つまり、サッレーカーとは、断食により身体を、瞑想等によって心の中の悪を、死に至るまで擦り減らしていく行為であるということができるだろう。

SS はサッレーカーの具体的な内容について記述しておらず、また、TSbh にもそれほど詳しい記述が見られないため、『ラトナカラング・シュラーヴァカーチャーラ』(*Ratnakaraṇḍasāravakācāra*, 以下 RSr) 124 以下の記述に基づいて補っておく。(TSbh の記述とは、必ずしも一致しないが、対応すると思われる箇所に関しては注で示す) 最初に、清浄な心持ちで愛情・憎しみ・執着・所有を放棄した後、優しい言葉によって身内の者と他人を許し、自らも許しを請わねばならない。これは、親しい者との最後の別れとも言える。そして、これまでに自らが行った悪行や他人に行わせた悪行、他人がするのを容認した悪行を偽ることなく告白し、死に至るまで大誓戒を保持して、聖典を読誦・学習することが要求される。この段階では、在家信者が守るべき小誓戒ではなく、出家修行者が守るべき大誓戒を保持することになるため、世俗的な立場を離れることになる。その後は、順に食物を放棄し、滑らかな飲み物 (= 牛乳などの乳製品) を摂取する。次に、滑らかなものも放棄し、

粗い飲み物（＝白湯など）を摂取する。さらには、粗い飲み物をも放棄して能力に応じて断食を行い、あらゆる努力を傾けて吉祥な者への帰依を表明するマントラを心中で唱えつつ、身体を捨てるべきであるとされる。

このサッレーカーナーの実践にあたっては、(1) 生きることを熱望すること、(2) 死ぬことを熱望すること、(3) 恐怖を思い出すこと、(4) 友人などを思い出すこと、(5) 天界などを望むことという5つの違反行為も述べられている。サッレーカーナーの果報は、涅槃（「至福」と表現され、輪廻からの解脱と同じ）であるとされる。

その他の重要な点で、以上のテキストに記されていないものを簡単に補っておこう。まず、サッレーカーナーに相応しい時期を前もって正確に知ることは難しい。そのため、いつかそれを現実に行うという決意表明である略式の誓戒を受けるのが通例とされている。¹¹このようにして、長い年月をかけて心の準備をするのである。そして、サッレーカーナー実践の時が来たならば、師に許可を求めねばならない。¹²サッレーカーナーが行われる場所としては、自宅や出家修行者の住む特別な断食用ホールが選ばれるようである。¹³

3. サッレーカーナーの位置付け

以上、サッレーカーナーの語義・定義、およびその内容を簡単に見てきたが、このサッレーカーナーは、ジャイナ教においてどのような位置付けにあるのだろうか。

サッレーカーナーは、すでに聖典文献群において、出家修行者だけでなく在家信者に対しても説かれていたことが確認できる。¹⁴そして、本稿で用いている TS や RSr などといった聖典期以降の文献においては、その位置付けがすでに確立している。例えば、TS 第7章は、主としてジャイナ教の誓戒（vrata）について述べた章であるが、サッレーカーナーについての記述は、7-22 から始まる小誓戒（aṇuvrata）を守る在家信者について述べた部分に含まれている。¹⁵また、RSr においても、サッレーカーナーに関する記述は、小誓戒、徳戒（guṇavrata）、学習戒（śikṣāvrata）の説明の後にある。そして、同様のテーマ

について論じるその他の文献においても、このような順序で説明されるのが通例となっている。¹⁶このように、我々の目には奇異な行為にも映るサッレーカーナーは、過酷な生活を送っている出家修行者だけでなく、一般の在家信者の生活規定の中にも位置付けられている。また、それだけにとどまらず、次のように述べる文献もある。

在家信者の宗教的義務とは、汚れなき正しい信仰、汚れなき小誓戒、徳戒、学習戒であり、死に際してのサッレーカーナーという儀礼によって完全なものとなる。

このように、在家信者にあっても、誓戒を遵守して禁欲的な生活を送った後、その宗教的人生を完結させるのに不可欠のものとしてサッレーカーナーが積極的に勧められているのである。

4. サッレーカーナーの問題点

—サッレーカーナーは自殺か否か?—

前章までに、サッレーカーナーの語義・定義と内容、およびジャイナ教文献における位置付けを検討してきたが、このような自発的な死には様々な問題が絡んでくる。本章では、その中でも最も重要なものと考えられる「サッレーカーナーは自殺か否か」という点を検討する。具体的には、ジャイナ教文献の記述に基づいて、いわゆる自殺とサッレーカーナーとがどのように区別されているのかを検討することになる。その前に、インド文化圏における自殺の概念と、ジャイナ教における自殺の概念を簡単に見ておきたい。

4.1 自殺の概念

4.1.1 インド文化圏における自殺の概念

自殺を非難すべきものとする考え方は世界中に見られるものであり、その

考え方の正否はともかく、なかば普遍的なものであると言える。それでは、ジャイナ教が属するインド文化圏においてはどうかであろうか。インドの膨大な文献群から自殺に関する記述を取り出すことは困難であるため、ここではヒンドゥー教徒の行動に大きな影響を与えた『マヌ法典』や『ヤージュニャヴァルキヤ法典』などの記述を中心にしておきたい。この両文献が直接的に自殺に言及する箇所は極めて少ない。¹⁷しかし、少ないながらも「無駄に生まれた者（祭式儀礼を行なわず無意味な生活を送る者）あるいは〔身分間の〕混血によって生まれた者、遍歴生活に身を置く者、自らを捨てる〔自殺〕者に対しては献水の儀式は行なわれない。」（『マヌ法典』5.89）、「異教徒の仲間に入る女、盗人女、夫殺し、気ままに男と寝る女、スラー酒を飲む女、自殺する女は、不浄の期間中の献水の儀式の水を受けるに値しない。」¹⁹（『ヤージュニャヴァルキヤ法典』3.6）などという記述からは、自殺者が他の不適切な者と並んで儀式から排除されているのを窺い知ることができる。その他にも、アートマン（自己）を正しく認識しないことによる悪い結果として「知る主体と知る主体でないものを、質料因と派生物を識別しない。断食しようとしたり、火に飛び込もうとしたり、水に身を投げようとしたりする。」（『ヤージュニャヴァルキヤ法典』3.154）という記述も見られる。²⁰また、法典ではないが、『実利論』第4巻第7章にも「人が欲望や怒りにかられ、あるいは過失により錯乱した女が、縄・武器・毒により自殺した時には、彼らを縄でしばり、旃陀羅に^{チャンドラー}引かせて王道を引きまわすべきである。彼等のために、葬式も親族による供養も行なわれるべきではない。」²¹という記述が見られるため、最低限ではあるが、ヒンドゥー教において自殺が禁じられていたことが確認できる。

その一方で、法典の中には「あるいは心を集中し、水と空気を食し、身体 of 倒れるまで、東北を目指して直進すべし。」（『マヌ法典』6.31）、「……あるいは、風を食し、肉体が消滅するまで東北に歩むべし。」（『ヤージュニャヴァルキヤ法典』3.55）などというように、人生の最終段階が近付いた者に野垂れ死にを勧めるような記述も認められる。また、『アトリ法典』214には、老齢により身体の清浄を保つ規定を守ることができず、治療も不可能な者に

は自殺を認めるような記述が見られる。²²その他にも、ヒンドゥー教には、夫の火葬の際に、生きながらにして寡婦と一緒に焼かれる「サティー」と呼ばれる慣習があったことも伝えられており、また、仏教においては、慈悲の極みとしての捨身の物語が伝えられている。²³つまり、いくらか世俗を離れた場面に目を移せば、人生の最終段階を自発的な死で締め括るという発想は、インド文化圏においては必ずしもジャイナ教に特有のものではないと言えることができる。

4.1.2 ジャイナ教における自殺の概念

前節において、インド文化圏においてはいわゆる自殺が非難されるものであることを確認したが、ジャイナ教においてはどうかであろうか。

ジャイナ教の物語にはしばしばセーニヤという名の王が登場する。²⁴彼はジャイナ教の開祖マハーヴィーラと同時代の人物であり、仏典に登場するビンピサーラ王（頻婆娑羅王）と同一人物である。晩年に、息子のアジャータシャトル（阿闍世）によって幽閉されてしまう出来事は『観無量寿経』導入部にも描かれており、いわゆる「王舎城の悲劇」として有名である。²⁵『観無量寿経』における王の最期は曖昧であるが、説一切有部の律（破僧事 17）などでは、長きにわたる幽閉の後に解放されるも、家臣たちが走り寄って来るのを見るや、さらに苦しい刑を科せられると思つてショック死してしまつたとされている。²⁶（しかし、その後、天に生まれ変わったビンピサーラ王は、自らの死因を「餓死」と表現している。）一方、ジャイナ教の伝承では、幽閉されて自殺を遂げたとされており、そのために、ジャイナ教信者でありながらも地獄に堕ちたと伝えられている。²⁷この物語は、いわゆる自殺がジャイナ教においても禁じられていたことを端的に示している。

聖典文献でも、いわゆる自殺は「愚者の死」に分類されている（注 6 を参照）。また、サッレーカーナについて記した論書に目を移すと、例えば SS ではいわゆる自殺を意味するサンスクリット語 “ātmavadha” を用いる際²⁸には、過失を意味する “doṣa” という語を付すことによって「自殺という過

失 (ātmavadhadoṣa, あるいは自殺による過失)」と表現している。このことも、ジャイナ教徒がいわゆる自殺を非難すべきものと捉えていたことを示している。

4.2 サッレーカーナーと自殺の区別

前節で確認したように、ジャイナ教徒はいわゆる自殺を認めない。そのため、ジャイナ教徒としては、宗教的人生を締め括る聖なる儀礼としてのサッレーカーナーと自殺を区別する必要が生じる。RSr 122 では、サッレーカーナーの実践が許される時として「災難、飢饉、老齢、不治の病」を挙げている²⁹。このようにサッレーカーナーの実践にはいくつかの条件があり、いつでも、誰にでも可能なわけではないということは「サッレーカーナーが単なる自殺ではない」というジャイナ教徒の主張を支持するものと思われる。つまり、最期が近付いて心身に不調をきたし、これまでに守り続けてきた誓戒を破るようなことがないように、自らの意志で死をコントロールすることが認められていると言える。

それでもなお、世俗的な立場では生命の側に重きを置くことが多いため、サッレーカーナーと自殺を同一視して、非難を浴びせることも考えられる（それは実際にあったものかもしれないし、ジャイナ教徒が先手を打って想定したものかもしれない）。こういった非難に対して、ジャイナ教徒はどのように答えているのであろうか。ここでは、そういった議論のひとつを、TS の注釈文献に基づいて紹介する。SS は、TS 7-22 に対する注釈の中で、以下のように述べている。

次のような見解があるかもしれない。

【反論】サッレーカーナーを実践している者は、自身の意図に基づいて寿命などを停止するから、自殺であることが帰結する。

【答え】そのようなことはない。なぜか？ 軽率ではないからである。なぜならば、軽率な活動に基づいて生命を滅ぼすことが殺生と言われて

いるからである。しかし、この「サッレーカーナーを実践している」者は軽率さに基づいて活動していない。なぜか？

欲望などがないからである。

実に、欲望・憎悪・迷妄に取りつかれた者は、毒・武器などを補助とする活動によって自分自身を損なうので、自殺となる。サッレーカーナーを実践している者には、そのような欲望などは存在しないので、自殺という過失に触れることはない。

この答えから、ジャイナ教徒はいわゆる自殺を「自己に対する殺生」と捉えていることが明らかである。また、SS には次のような詩節が引用されている。

聖典において、欲望などの不生起が不殺生であると教示されている。一方、それ（＝欲望など）の生起が殺生であると、ジナたちによって述べられている。

この場合も、中間の「軽率さ」が省略されているだけで、構造は同じである。このように、殺生とそうでないものを決める根本的な要因として、欲望・憎悪・迷妄といった行為主体の心の状態が挙げられている点は注目に値する。極端な例を挙げれば、誤って蛇を打ち殺してしまった場合よりも、たとえその打たれたものが蛇ではなくて縄であったとしても、殺そうという意図を持って打った場合の方が罪が重い³⁰と考えるのである。そして、この殺生に関する考え方が「自己に対する殺生」である自殺に対しても適用されている。ここで考えられている因果関係をまとめれば、次のようなものになるであろう。

【殺生となる場合】

欲望・憎悪・迷妄がある → 軽率さがある → 殺生を犯す

【殺生とならない場合】

欲望・憎悪・迷妄がない → 軽率さがない → 殺生を犯さない

↓ 応用

【自殺となる場合】

〔自己に対する〕欲望・憎悪・迷妄がある → 軽率さがある → 自殺となる

【自殺とならない場合】

〔自己に対する〕欲望・憎悪・迷妄がない → 軽率さがない → 自殺とならない

むすび

以上、ジャイナ教のサッレーカーと呼ばれる行為の語義・定義や内容、およびその位置付けを概観した後、サッレーカーと自殺を同一視する世俗的な立場からの非難にジャイナ教徒がどのような方法で答えているのかを見てきた。

自殺の定義を最も広く解釈した場合、このサッレーカーという行為もそこに含められるかもしれない。しかし、本稿で検討した限りでのジャイナ教徒の主張に基づいて、サッレーカーがいわゆる自殺と異なる点をまとめるならば、以下のようになるだろう。

- (1) 将来的に実践することの決意表明として、早い段階で略式の誓戒を受けるのが通例となっている。また、実践を開始するにあたっては師の許可が必要であり、この時点においても、本人の意思が確認される。
- (2) サッレーカーの実践が認められる条件としては、災難、飢饉、老齢、不治の病などが挙げられており、すでに何らかの形で死期が迫っている。
- (3) 宗教的な理由により自らの意志で死をコントロールする行為であり、死に至るまでの時間は、聖典の学習・瞑想・マントラの低唱などといった宗教的実践に充てられる。
- (4) 欲望・憎悪・迷妄などによって自らを滅ぼそうとしているのではな

い。また、いわゆる自殺のように毒や武器などを用いることもない。

また、サッレーカーナーが「身体を擦り減らす」ことを意味することは先述したが、他にも「身体からの解放 (tanuvimocana)」「身体を捨てるべきである (kāyaṃ tyajet)」という表現が認められる。これに関しては、靈魂は不滅かつ本来的に清浄なものであるが、身体は善・悪の行為により付着した不浄な物質的業 (karman) によって形成されたものであると考えるジャイナ教の霊肉二元論的発想が大前提となっている。

前近代的な遺物のようにも思われるこのサッレーカーナーは、驚くべきことに、現在もお出家修行者を中心に実践されている。Tukol [1976] では、第8章のすべてを、サッレーカーナーを行ったアーチャーリヤ・シャーンティサーガラについての記述に充てている。ジャイナ教空衣派の聖者アーチャーリヤ・シャーンティサーガラは、視力が弱くなり、身体が思うように動かなくなったため、1955年8月18日にサッレーカーナーを開始し、1955年9月18日の早朝、マントラを唱えつつ身体を離れたという。第3章にも、1973年の事例が2つ紹介されている。スダルマサーガラ・ムニは、老齢と視力の低下を理由に、1973年8月13日にサッレーカーナーを開始した。規則に従って食物を減らしてゆき、静かに聖典の読誦、自己の真実を黙考する中、1973年9月21日にマントラを唱えつつ身体を離れた。彼のもとには、約15,000人の人々が集まったという。一方、1973年9月21日には、パーラーマティの地でシュリー・バドラバーフ・ムニがサッレーカーナーを行い、成就の祝祭には25,000人が集まったことが記されている。また、学術的な文献ではないが、坂本知忠『ジャイナ教の瞑想法』（ノンブル社、1999年）にも、ラージャスターン州ラードウヌーンにおいて、老尼僧がアーチャーリヤにサッレーカーナーの許可を求める場面を目撃したとある。これは1989年のことと記されている。

付論：インドのある司法関係者の見解

本論では、ジャイナ教徒がサッレーカーと自殺をどのように区別しているのかを検討した。しかし、ジャイナ教内部で問題が解決していたとしても、近代的国家における断食死は、倫理的問題だけでなく、法的な問題にも絡んでくる可能性が考えられる。サッレーカーを中心に論じた文献は非常に少ないが、その中のひとつに T.K.Tukol 氏の著書 *Sallekhanā is not suicide* がある。ここではその内容を紹介し、氏のサッレーカーに関する解釈について検討する。この書は全 8 章から成るが、その中でも書名とタイトルを同じくする第 7 章の中に氏のサッレーカー解釈が表れていると考えられるため、ここではこの章の内容を検討することにしたい。³³

Tukol 氏は、自殺とサッレーカーとを区別するチェックポイントとして、次の 4 つを挙げている。

- (1) 意図 (intention)
- (2) 状況 (situation)
- (3) 用いられる手段 (the means adopted)
- (4) 行為の結果、またはその影響 (the outcome of the action or its consequences)

それぞれについて検討してみると、(1)～(3) は、古くからジャイナ教徒が用いてきた視点と同じである。まず、(1) は、本論で見たように、サッレーカーと自殺を区別する際にジャイナ教徒が用いてきた視点と一致する。(2) としては、「宗教的な目的を完成するためであること」や「災難、飢饉、老齢、不治の病の時に行うべきものであること」を挙げているため、これも本論で述べた内容と一致する。(3) についても、自殺では首吊り、服毒等々の方法が用いられるのに対し、サッレーカーでは規則正しい方法に従って徐々に断食し、しかもその間を聖典の読誦、瞑想、内省などによって過ごすという点で異なるとしているのも、これまでに見てきたことと重なっている。

氏の宗教的立場については明らかにされていないものの、その見解は明らかにジャイナ教の伝統的な立場に依拠している。

その一方で、(4) は、これまでに見られなかったものであるが、それは次のように説明されている。まず、このサッレーカナーの誓戒を立てた時点であらゆる者との結び付きが断たれているため、身近な者などに悲しみをもたらすことはない。それどころか、この行為の結果は尊敬の念を喚起し、残された者たちの信仰を強めることになるとしている。さらには、サッレーカナー成就の³⁴機会は「死の大祭」(mrtyumahotsava) と呼ばれる宗教的祝祭として扱われる。そこでは礼拝が行われ、賛歌が歌われ、マントラが唱えられるため、新たな靈感や信心に目覚める機会となるというのである。他の3点とは異なり、自殺との相違を結果に基づいて述べていることもあり、氏の主観が色濃く反映しているという印象を免れないであろう。

その他にも、氏は現代の様々な著述家（特に西洋の）の意見を挙げて逐一批判を加えている。³⁵ここではその詳細に立ち入らないが、氏の抛って立つところは、これまでに述べたように、伝統的なものと極めて近い。また、批判されている著述家たちに宗教・文化の違いに基づく偏見が認められるのも確かである。サッレーカナーは、2,000 年近く行われてきたうえに、ヒンドゥー教などの他宗教においても同様のことが行われていたため、インドにおいてはある意味で「公認の儀礼」となっていた。そこへ、近代以降になって急速に接触する機会が増え、しかも文化的な背景を大きく異にしていた者たちが、新たな批判者として現れたことへの対応と言えるだろう。

■略号表

RSr	<i>Ratnakaraṇḍaśrāvākācāra</i> (ed. by Paṇḍit Pannālāl 'Vasant' Sāhityācārya, Yugavīrasamantabhadragranthamālā 2, Vārāṇasī, 1972).
SS	<i>Sarvārthasiddhi</i> (ed. by Siddhāntācārya Pt. Pūlacandraśāstrī, New Delhi, 1944).
TS	<i>Sabbhāṣyatattvārthādhigamasūtra</i> (ed. by Vidyāvāridhi Paṇḍit Khūbacandrajī Siddhāntaśāstrī, Rāyacandrajainasāstramālā, Bombay, 1932).
TSbh	<i>Tattvārthādhigamasūtrabhāṣya</i> → TS

■参考文献

- 奥田清明 [1976] ジャイナ教における *marāṇa* の分類、『奥田慈應先生喜寿記念 仏教思想論集』平楽寺書店、pp.1153-1165.
- 土橋恭秀 [1979] *Himsā* の大小について、『印度学仏教学研究』27-2、pp.27-31.
- Jaini, P. S. [1979] *The Jaina Path of Purification*, Motilal Banarsidas Publishers, Delhi.
- Tukol, T. K. [1976] *Sallekhanā is not suicide*, (Lalbhai Dalpatbhai Series, No.55), L. D. Institute of Indology, Ahmedabad.

■註

- 1 Tukol [1976] の第3章では、主として *Epigraphia Carnāṭikā* Vol.II (Director of the Archeological Researches in Mysore, Mysore) に収められた碑文の記述に基づいて、過去の約1,500年間にわたった数多くの事例が紹介されている。
- 2 デュルケーム『自殺論』(宮島喬訳、中公文庫、1985年) p.269, II.6-10.
- 3 サッレーカーニに関する記述は、ジャイナ教の古い聖典文献にまで遡ることができるが、その量は膨大であり、内容も多岐にわたるため、現在の筆者の能力を超えている。聖典文献にまで遡ったうえでの考察は、今後の課題としたい。本稿では、ジャイナ教の白衣派・空衣派の両派から権威を認められている唯一の文献で、聖典の記述をまとめたものと考えられる『タットヴァールタ・アディガマ・スートラ』(*Tattvārthādhigamasūtra*) とその古い注釈文献を使用し、不足部分に関しては、在家信者の生活規定に関する文献の中でも標準的なものとしてしばしば言及される『ラトナカランダ・シュラーヴァカーチャラ』(*Ratnakaraṇḍaśrāvākācāra*) を用いて補う。

- 4 奥田 [1976] では、akāmarāṇa を「不肖不肖の死」と訳しているが、本稿では分かりやすく「望まない死」と改めた。
- 5 しかし、出家修行者の場合と在家信者の場合とで、来世の生まれは異なる。「自発的な死」は、同聖典の別の箇所 (5.32) でさらに、(1)bhaktaparijñā, (2)īnginī, (3)pāḍopopagamaṇa の3つに分けられ、注釈者による説明がある。また、最古の聖典のひとつ『アーヤーランガ』(*Āyāraṅga*) にも3種の特別な死に方が見られ、注釈者が上記の3つに当てはめているため、奥田 [1976] では両者が同様のものであったと考えている。本稿ではこの3種の死の詳細には立ち入ることをせず、いずれもが、概して死に至るまで不動の姿勢を保つことや断食などを要求する厳しいものであることを確認するととめておく。Cf. 奥田 [1976] p.1154, 1.4-p.1155, 1.2.
- 6 「愚者の死」は『バガヴァイー』(*Bhagavāi*) において、さらに以下の12種に分類される。(1) 実践を離れてしまった、形だけの出家の死 (valāyamarāṇa)、(2) 感官の対象に縛られている一般人の死 (vas'aṭṭamarāṇa)、(3) 羞恥心や体面や高慢さのゆえに、罪過を告白することなく、「内に棘を持ったまま死ぬこと」(antosallamarāṇa)、(4) 死者が生前と同じ生を受ける死に方 (tabbhavamarāṇa)、(5) 山から飛び降りること (giripadaṇa)、(6) 木から飛び降りること (tarupadaṇa)、(7) 入水 (jalappavesa)、(8) 焼身自殺 (jalaṇappavesa)、(9) 服毒自殺 (visabhakkhaṇa)、(10) 刀剣を用いての死 (sarthovādaṇa)、(11) 縊死 (vehāṇasa)、(12) 禿鷹に食われて死ぬこと (giddhapaṭṭha)。一方、「賢者の死」は(1) 身体を全然動かすことなく死んでいくこと (pāovagamāṇa) と(2) 断食死 (bhattapaccakkhāṇa) の2種に分類される。この両者のさらなる下位分類については、Cf. 奥田 [1976] p.1156, 1.3-8.
- 7 ただし、これはあくまでも注釈家たちの見解であり、本来の意味に関しては言語学的な視点から解明する必要があるだろう。さらには、ジャイナ教と共通の土壌から誕生した仏教においても *saṃlekha* という語が用いられていることを考慮に入れるならば、古い仏教文献等についても精査する必要があると考えられるが、今後の課題としたい。また、サッレーカナーは、三昧死 (*saṃādhimarāṇa*) と呼ばれることもある。
- 8 TSbh には「最高の誓戒を備えて (*uttamavratasampanna*)」とある。
- 9 TSbh には「4番目、6番目、8番目の食事を摂るという減食によって身体を正しく擦り減らし……4種の食べ物を拒んで (*avamaudaryacaturthaṣaṣṭāstabhaktibhir ātmānaṃ saṃlikhya……caturvidhāhāraṃ pratyākhyāya*)」とある。
- 10 TSbh には「瞑想・内省に専心し、善きものの想起と三昧に満たされて

(bhāvanānuprekṣāparaḥ smṛtisamādhībahulo)」とある。

- 11 Cf. Jaini [1979] p.181, //19-23.
- 12 Cf. Jaini [1979] p.230, //4-12.
- 13 Cf. Jaini [1979] p.232, //9-10.
- 14 例えば、『ウヴァーサガダサーオー』(*Uvāsagadasāo*) では、断食によって死んだ在家信者アーナンダらの物語が紹介されており、ジャイナ教信者の模範とされている。
- 15 すなわち、7-20 で在家信者が小誓戒を守る者であることを述べ、7-21 で、digvrata (小さな悪行を回避するために、行動を10の方角にわたって制限すること)、deśavvrata (同じく、場所を制限すること)、anarthadaṇḍavvrata (様々な無用の悪事を為すのを避けること)、sāmāyika (反省的瞑想)、proṣadhōpavāsa (定日の断食)、upabhogaparimāṇa (飲食その他の制限)、atithisaṃvibhāga (客人への分け前を行うこと) といった副次的な誓戒について述べた後、7-22 でサッレーカナーに言及するという構成になっている。小誓戒は、出家修行者が守るべきものと同じく、不殺生 (ahimsā)、不妄語 (satya)、不盗 (asteya)、性的禁欲 (brahma)、無執着 (aparigraha) の5つから成る。出家修行者の場合は、すべてを完全に守らなければならないため「大誓戒」(mahāvratā) と呼ばれるのに対して、在家信者の場合は部分的に守るという意味で「小誓戒」(aṇuvratā) と呼ばれる。digvrata, deśavvrata, anarthadaṇḍavvrata の3つをまとめて徳戒 (guṇavratā) と呼び、sāmāyika, proṣadhōpavāsa, upabhogaparimāṇa, atithisaṃvibhāga の4つをまとめて学習戒 (śikṣāvratā) と呼ぶこともある。ただし、徳戒、学習戒にどれを含めるかは、ジャイナ教の中でも一定していない。
- 16 同じくジャイナ教在家信者の生活規定について書かれた文献『プルシャールタ・シッディ・ウパーヤ』(*Puruṣārthasiddhyupāya*) その他でも、小誓戒、徳戒、学習戒に言及した後、サッレーカナーに言及するという順序が確立している。
- 17 『マヌ法典』全体を見渡しても、明確に自殺者に言及している箇所は一箇所 (5.89) のみである。もう一箇所 (3.245) に関しては注釈文献の間で解釈が分かれている。Cf. *Manu's Code of Law* (= *Manusmṛti*, ed. by Patrick Olivelle, New York, 2005) p.266, 3.245 に対する注。『ヤージュニャヴァルキヤ法典』の場合も3箇所に限られている。
- 18 『マヌ法典』の和訳は渡瀬信之訳『サンスクリット原典全訳 マヌ法典』(中公文庫、1991年) による。
- 19 『ヤージュニャヴァルキヤ法典』の和訳は井狩弥介・渡瀬信之訳注『ヤージュニャヴァルキヤ法典』(東洋文庫 698、平凡社、2002年) による。

- 20 その他に、「牛・王・ブラーフmanaに殺された者、また、出陣、断食、武器、火、毒等によって自ら望んで自らを滅ぼした者については、[そのサビンダ親族は]ただちに[清まる]。」(3-21ab) という記述も見られるが、この場合は自殺者そのものではなく、その親族の清めに関する規定なので直接は関係しないと考えられる。
- 21 『実利論』の和訳は上村勝彦訳『カウティリヤ 実利論——古代インドの帝王学』(上)(岩波文庫、1984 年)による。
- 22 Cf. *Sixteen Minor Smṛti (Sanskrit Text, English Translation, Notes and an Introduction)*, Manmatha Nath Dutt, Parimal Publications, Delhi, p.37, l.26以下; *History of Dharmasāstra* Vol.III, Dr. Pandurang Vaman Kane, Bhandarkar Oriental Research Institute, Poona, 1973, p.958, l.31 以下。
- 23 ただし、サティーに関しては、純粹に自発的な死とは言いがたく、周囲の圧力などといった要因も大きいとされる。Cf. 『バシャムのインド百科』、A. L. バシャム著(日野紹運・金沢篤・水野善文・石上和敬訳)、山喜房仏書林、2004 年、p.196a, l.2 以下。一方、慈悲の極みとしての捨身は、釈迦の前世譚に見られる。中でも、飢えた虎の子に我が身を与えたという王子本生、飢えた仙人に兎が我が身を布施した兎本生などが有名である。自殺に関する仏教の公式見解と呼べるようなものは見当たらないが、『善見律毘婆沙』には、死期の迫った僧侶が周りの者たちに迷惑をかけるのを避けるため、食物や衣、薬を断つことによって死んでも罪にはならないという記述が見られる。Cf. 大正蔵 24, 752c.
- 24 対応するサンスクリット名はシュレーニカ (Śreṇika)。Cf. *Prakrit proper names* part II, (Mohanlal Mehta & K.Rishabh Chandra, Lalbhai Dalpatbhai Series No.37, Ahmedabad, 1972) p.856.
- 25 Cf. 大正蔵 12, 340c-346b. 和訳としては『浄土三部経(下) 観無量寿経・阿弥陀経』(中村元・早島鏡正・紀野一義訳注、岩波文庫、1964 年)、『大乘仏典 6 浄土三部経』(山口益・桜部建・森三樹三郎訳、中公文庫、2002 年) などがある。
- 26 Cf. *The Gilgit Manuscript of the Sanghabbedavastu* partII, (ed. by Raniero Gnoli, Istituto Italiano Per Il Medio Ed Estremo Oriente, Roma, 1978) p.159, ll.1-7; 大正蔵 24, 190b.
- 27 出典については、注 24 に挙げた文献に記されている。仏教の『十誦律』の記述も自殺との見方が可能である。Cf. 大正蔵 23, 262a.
- 28 サンスクリット語で自殺を意味する語には様々なものがある。例えば Monier Williams, *Dictionary, English And Sanskrit* の suicide の項目には、ātmaavadha を含む 13 種

の語が挙げられている。これらは、「自己を害すること」を意味するもの (ātmaghāta, ātmahatyā, ātmavadha, ātmahanana, ātmavyāpādana, ātmadroha)、「生命を捨てること・害すること」を意味するもの (prāṇatyāga, jīvitatyāga, jīvotsarga, prāṇaparityāga, svaprāṇahimsā)、「身体の放棄」を意味するもの (dehartyāga)、「望んでの死」を意味するもの (kāmyamarāṇa) という4種に大別できる。

- 29 また、TSbh でも、死に関連のある衰弱 (kālasaṃphananadaurbalya) や災難 (upasarga) を挙げている。Jaini [1979] p.229, //14-16. によると、実際は、老齢、不治の病が理由となることが多いようである。
- 30 このような手段を用いての自死は、聖典文献ですでに「愚者の死」として分類されている。注6を参照。
- 31 Cf. 土橋 [1979] p.933, //24-26.
- 32 Indian Penal Code Section 309 では、自殺そのものの定義はないが、自殺しようとした者に禁固刑、罰金刑、もしくはその両方を課するとしている（現行のものは未確認）。このセクションの内容について、ある注釈者たちは断食や身体の維持を止めることも含めうると解釈しているが、Tukol 氏は、他の条文の内容も合わせて解釈することにより、他者に危害を加えない限り問題はないとする。また、そもそもインドのほとんどの宗教では断食が行われており、それらが他者を傷付けない敬虔な動機によるものであることを指摘している。さらには、憲法で保障されている信教の自由との齟齬についても指摘している。Cf. Tukol [1976] p.83, //16-p.84, //7.; p.96, //19-p.97, //2.
- 33 第7章以外の内容を簡単に紹介しておく。第1章ではジャイナ教について、第2章ではサッレーカーナーについて概観している。さらに、第3章では、碑文の記述に基づいて数多くのサッレーカーナーの事例を紹介し、第4章では他宗教における自発的な死を扱っている。第5章は自殺一般、第6章は自殺と法について記しており、最後の第8章はサッレーカーナーを行った現代の高名な聖者の事例を紹介している。
- 34 Cf. Tukol [1976] p.95, //24.
- 35 Cf. Tukol [1976] p.90, //3 以下。

(ほった・かずよし 東京大学大学院人文社会系研究科アジア文化研究専攻博士課程)

Fasting unto Death : Holy Ritual or Suicide?

Kazuyoshi Hotta

Approximately 2,500 years ago, the *brāhmaṇa* priestly caste had power in India. They performed ritual animal sacrifices. In this context, Jainism arose as an anti-brahmanist movement. Jainism is characterized by non-violence (*ahimsā*). Jaina monks must steadfastly observe the five great vows (*pañcamahāvratā*), which include non-violence. Meanwhile, laymen are only required to observe the “small vows” (*aṇuvratā*). However, Jainism requires all to be strict vegetarians and to enter a profession with the least potential for violence. In spite of their strict attitude against non-violence, the practice of fasting unto death or *sallekhanā* is praised in Jainism. Famous sociologist Emile Durkheim referred to this ritual in his work.

This paper discusses the ritual of *sallekhanā*, based on the *Tattvārthadhigamasūtra* and its commentaries. When necessary, the typical work on the rules of layman called *Ratnakaraṇḍaśrāvaka-cāra* is also referred to. Section I outlines the classification of death in Jainism. Death in Jainism is roughly divided into the categories “death of a wise man” and “death of a fool”. What this section makes clear is that *sallekhanā* corresponds to “death of a wise man”. Section II considers the meaning and definition of *sallekhanā*. This section shows that the meaning of the word *sallekhanā* is interpreted as “to thin the passions and the body properly”. The process of this ritual is also concretely explained. In Section III, we consider *sallekhanā* in Jaina texts. This consideration makes clear that not only monks, but also layman are encouraged to perform *sallekhanā*.

From the worldly standpoint, *sallekhanā* is often seen as suicide. Section IV

analyzes the difference between *sallekhanā* and suicide in Jainism. This analysis makes clear the following point. With reference to violence, Jainism regards intentions more important than results. This theory is applied to *sallekhanā* to distinguish it from suicide. Even if this problem is solved in Jainism, it seems quite possible that fasting unto death in a modern nation causes not only ethical problems, but legal ones as well. Thus, as an appendix, I would like to take up the content of *Sallekhanā is not suicide* written by T.K.Tukol. This is rare work on *sallekhanā* written by an Indian judge. We will examine his interpretation of *sallekhanā*.